



おやがうち
親ヶ内



川の街中から見付を過ぎて東又地区に入る。八千数にある良心市を過ぎ本堂の交差点の少し手前で小さな橋を渡る。うっかりしていると気づかないくらい小さな橋である。橋の下には与津地川が流れる。八千数地区とこの与津地川に挟まれたところが親ヶ内である。現在23世帯49人が暮らしている。

戦国期・天正17年(1589年)の地検帳には「親我地之村」とか「ヲヤカチ之村」と記載されていて、もとは「オヤガチ村」といったのではないかと考えられている。しかし、その名についてそもそも由来は不明である。江戸時代前期・元禄年間の記録にも「親我地村」とある。それがいつ、なぜ「親ヶ内」となったのかもわからない。

さて、江戸時代初期の土佐藩の藩政改革に尽力した野中兼山の時代に導入された「郷土制度」というものがある。この「郷土制度」とは、簡単に言えば「百姓、町民などの武士以外の身分の者でも、ある一定面積以上の新田開発を行ない米作に従事し、その地に定住した者には名字帯刀を許し武士とする」というもの。これによつて武士となった者を「郷土」という。街を離れ農村で田を耕し生計を立てる武士。なるほど「郷土」の「土」である。この郷土であるが、土農工商という当時の階級社会の中で、下級の身分からもつとも

上級に位置づけられている武士にしてくれるわけだから、夢のような制度であったかもしれない。ところが喜んでばかりもいられないのである。いざ戦となれば一目散に駆けつけなければならぬからだ。武士はサムライとしての緊急召集に即応して馳せ参じなければならぬので、これを「駆けつけ郷土」という。郷土というものは、泰平の世においては、身分が保障され安心して食料生産にたずさわれるという、いわば特権的メリットがあるものの、いざ動乱が起れば真っ先に戦の最前線に送られるのである。



とある分かれ道に
なかなか立派な石灯籠が立っている

江戸時代後期、親ヶ内(親我地村)に下元某という郷土がいた。時代は幕末の動乱期である。彼は戊辰戦争に際して「駆けつけ郷土」として新政府軍によつて駆り出され、白虎隊の奮闘で有名な会津攻めに参戦し戦死。

土佐の西部のこの辺境の地から、官軍の兵としてたつたひとりで東北の地に赴き、戦い、討ち死にした彼の心中はどのようなものであったのだろうか。

町のうごき	(6月30日)		前月比	出生 死亡 転入 転出			
	男	女		男	女	計	(6月中の届出)
	8,490	9,463	-13	3	15	11	12
			-14	2	13	15	18
	17,953		-27	5	28	26	30
	世帯数	8,652	-5				
	窪川地域	12,576人		大正地域	2,578人	十和地域	2,799人

四万十川の
水質状況

	適正值(mg/l)	7月12日
リン酸	≤ 1.0	0.214
硝酸	≤ 0.5	0.335
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.75
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部